

本校では、「中学校チャレンジテストにおける標準化得点を同一の母集団で比較し、いずれの学年も前年度より向上させる。」を年度目標とし、年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「漢字検定・英語検定・日本語能力検定試験の合格률을60%以上にする。」ことを設定した。

上記を達成するために、以下の3つの取組を行った。

## 1. 取組内容(1)について

### 1-1. 取組を実施する必要性

本校では、外国籍・外国にルーツのある生徒が全体の40%以上在籍しており、日本語能力の向上が大きな課題である。特に日本語が全く理解できていない生徒に対する学習支援はもちろん、日々の学校の連絡事項を理解させることにも困難をきたしているため、各クラス一台の翻訳機を備える必要がある。また年間を通して外国から編入してくる生徒も多く、日本語指導において、学習進度がそれぞれ異なる。それぞれに応じた学習を進めるために、タブレット端末を活用した個別学習が効果的であると考えている。またルビうち教科書は、日本語指導を要する生徒が学習に取り組む際に、最も必要な教材である。

### 1-2. 取組を実施することにより期待できる効果

- ・日本語が全く理解できていない生徒の初期対応に効果が期待できる。
- ・効率的に習熟度に応じた日本語能力を習得することができる。
- ・学習言語も効率的に学ぶことができる。
- ・日本語指導を要する生徒たちの学習習慣の確立に資する。

### 1-3. 具体的な実施内容

#### ① タブレット端末を活用した個別学習

今年度、急増した編入生等に対して、日本語指導用のアプリをタブレット端末にダウンロードし効果的に学習を進めることができた。

#### ② ルビうち教科書の活用

本校学校元気アップ推進事業のコーディネーターが作成したルビうち教科書を日本語指導を要する生徒に配付し、学習に役立てることができた。

#### 1－4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

・取組に対する達成状況：B

・評価理由：

取組内容①・②においては、今年度の日本語能力検定試験の合格率が62%（21名中13名が合格）により、一定の成果をあげることができた。しかし、年度途中から編入してきた生徒の合格率が50%であった。

以上の成果から、B評価とした。

#### 1. 取組内容（2）について

##### 2－1. 取組を実施する必要性

本校では、渡日間もない日本語がほとんど理解できていない、日本語指導を要する生徒に対しては、国語・理科・社会の授業を抽出して日本語指導教室で日本語の学習をしている。日本語能力検定試験でN4レベルを合格した生徒から上記の3教科に関しても通常学級で授業を受けるシステムをとっている。個人差はあるが、一定期間通常学級での授業を受けていないため、上記3教科については顕著な学習課題がみられる。課題解決に対しては、漢字検定を活用した国語の語彙力の向上、理科・社会の一問一答式の問題集を活用した繰り返し学習の必要性がある。

##### 2－2. 取組を実施することにより期待できる効果

- ・全ての教科の基礎学力となる語彙力・表現力が向上し、全校生徒の基礎学力の向上が期待できる。
- ・共通目標を持たせることで、お互い切磋琢磨し、効果的な学力の伸長にもつながる。
- ・問題集で反復学習することで、基礎・基本の学習用語の定着も期待できる。
- ・特に日本史などの苦手分野を効果的に学習することができる。

##### 2－3. 具体的な実施内容

###### ① 漢字検定に向けた取組み

国語の授業等において、過去の級別問題を受験し、目標の級を決定する。各生徒が受験する級の問題集を活用し学習をすすめ、学年の総合などの時間にも対策に取り組んだ。とくに漢字検定の一週間前には放課後図書室を利用し、集中学習会を実施した。また生徒会による漢検の問題掲示や昼休みの放送による漢字クイズは、生徒の取組み意欲を高めた。

## ②理科・社会の問題集の活用

理科・社会の基本の学習用語の定着を目ざして、全生徒に理科・社会の一問一答式の問題集を持たせている。定期テストにおいて、この問題集からも出題するなど生徒の学習意欲の維持にも努めた。

### 2－4．取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

- ・取組に対する達成状況：A
- ・評価理由：

取組内容①においては、今年度の漢字検定試験の合格率が72%（昨年度60%）、10月の3年生の統一テスト（同一母集団ではないので経年比較するのは難しい）の正答率が対大阪市割合、国語101%（昨年度91%）、また1月の2年生のチャレンジテスト（同一母集団）の得点が対大阪府割合、国語98%（昨年度96%）により、大きな成果をあげることができた。

取組内容②においては、10月の3年生の統一テスト（同一母集団ではないので経年比較するのは難しい）の正答率が対大阪市割合、理科92%（昨年度82%）、社会92%（昨年度96%）、また1月の2年生のチャレンジテスト（同一母集団だが理解・社会は未実施のため経年比較は難しい）の得点が対大阪府割合、理科88%、社会106%により、一定の成果をあげることができた。

以上の成果から、A評価とした。

### 3－1．取組を実施する必要性

本校では、フィリピン・中国をはじめ多くの外国籍の・外国にルーツのある生徒が在籍している。日本語面では課題はあるが外国籍の生徒が各学級にいることは、英語を学ぶ環境としてはメリットがある。本校の特色として、学力向上に関して、英語に力を入れる学校と打ち出し、「強み」を伸ばして課題を解決する方法が効果的であると考えている。その一つの方策として、全生徒対象の英語検定試験を実施する必要性は十分にある。

### 3－2．取組を実施することにより期待できる効果

- ・学校全体の英語力を向上させることができる。
- ・将来を見据えた目標を持たせることができ、学習意欲を喚起できる。
- ・生徒の視野が広がり、進路選択の幅が広がる。
- ・多文化共生社会に対する理解が深まり、生徒の人権感覚も高めることができる。

### 3-3. 具体的な実施内容

#### 英語検定に向けた取組

英語の授業を中心に、過去の級別問題を活用し、目標の級（3年生は3級以上）を決定する。各生徒が受験する級の問題集を活用して学習をすすめ、学年の総合の時間などでも対策に取り組んだ。とくに英語検定の一週間前には放課後パソコン室を利用し、リスニング問題等の集中学習会を実施した。また一次合格者に対する面接練習も実施した。

### 3-4. 取組に対する達成状況（A～D）及びその評価理由

- ・取組に対する達成状況：A
- ・評価理由：

今年度初めて実施した全生徒対象の英語検定試験において、合格率が67%（英検1級1名、準1級2名、2級1名の合格）であった。3年生の英検3級の合格率は46%、また大阪市の英検I B Aにおいて、英検3級の英語力を有する者は74%（大阪市の平均は54%）、10月の3年生の統一テスト（同一母集団ではないので経年比較するのは難しい）の正答率が大阪市割合、英語102%（昨年度94%）、また1月の2年生のチャレンジテスト（同一母集団）の得点が大阪府割合、英語101%（昨年度95%）により、大きな成果をあげることができた。

以上の成果から、A評価とした。

## 1. 総論

### 2-1. 年度目標の達成状況、総評

本校では、上記の取組を実施することにより、「中学校チャレンジテストにおける標準化得点を同一母集団で比較し、いずれの学年も前年度より向上させる」という年度目標に対して、「いずれの学年も前年度より向上させる」ことができた。また年度目標に応じた事業効果を測る指標として、「漢字検定・英語検定・日本語能力検定試験の合格률을60%以上にする」ことを設定し、これに対して、「取組実施前後比較において合格률で2~12%」上回ることができた。

以上の結果から、年度目標に対する達成状況を「A」評価とした。

これは、チャレンジテストにおいて、3年生 97.8（2年生時 94.4）、2年生 5教科 100.4（1年生時 3教科 94.8）1年生 3教科 101.4 という結果から3学年とも成果があったと考えている。生徒に検定試験等の目標を持たせることで、年間を通して意欲的に学習に取り組ませることができた。ただ受験するだけでなく、全職員の生徒への個に応じた支援があったので、生徒たちは大きな達成感を得ることができた。生徒と教職員のさらなる信頼関係につながったと同時に、何より生徒の自己肯定感を高めることができたことが今年度取組の最大の成果であると考えている。

## 2－2．学校協議会における意見

学校協議会においては、目標に対する達成状況から成果をあげたことに対して、高評価をしていただきました。本校の教職員が一人一人を大切にす  
る教育を実践してきたこと、一人一人それぞれの課題を抱える生徒に対し  
てきちんと向き合い確かな成長につなげたことに対して、労いの言葉をい  
ただくと同時に、さらなる成長を目ざして取組の続行を求める意見もあり  
ました。